

2. 間門松沢第1号墳出土刃関双孔鉄剣について

(1) はじめに

間門松沢第1号墳第3埋葬施設から出土した鉄剣は、刃関部に双孔を穿つ特徴的な目釘孔をもつ。刃関双孔をもつ鉄剣は、弥生時代後期を中心に方形周溝墓や礫床墓、甕棺墓といった墓域から数多く出土しているが、古墳時代にまで時期が下るものは極端に少なくなる。さらに、古墳時代中期以降の出土例となると、管見に触れる限り、神奈川県厚木市の吾妻坂古墳出土例（西川編2004）、石川県能美市の下開発茶臼山9号墳出土例（三浦編2004）以外に類例を見出すことができない。

前期古墳から出土する刃関双孔鉄剣の中には、装具への固定に際して目釘孔を使用しないやり（註1）に転用される資料が含まれている。これらの剣は刃関双孔をもちながらも、把装具への装着に際して、目釘を用いた固定がなされなかった事例である。豊島直博氏は、古墳時代の刃関双孔をもつやりに関して、弥生時代から長く使われ続けた伝世品である可能性を指摘している（豊島2008b）。古墳時代の刃関双孔鉄剣の出土事例が少ないため、その意義については評価が難しい。今後の類例の増加を俟ちたいところであるが、ここでは豊島氏の論考に導かれ、弥生時代以来の伝世品である刃関双孔鉄剣が古墳時代にも残存するという観点から、若干の検討を試みたい。

(2) 刃関双孔鉄剣の類例（第108図、第39表）

①弥生時代の刃関双孔鉄剣

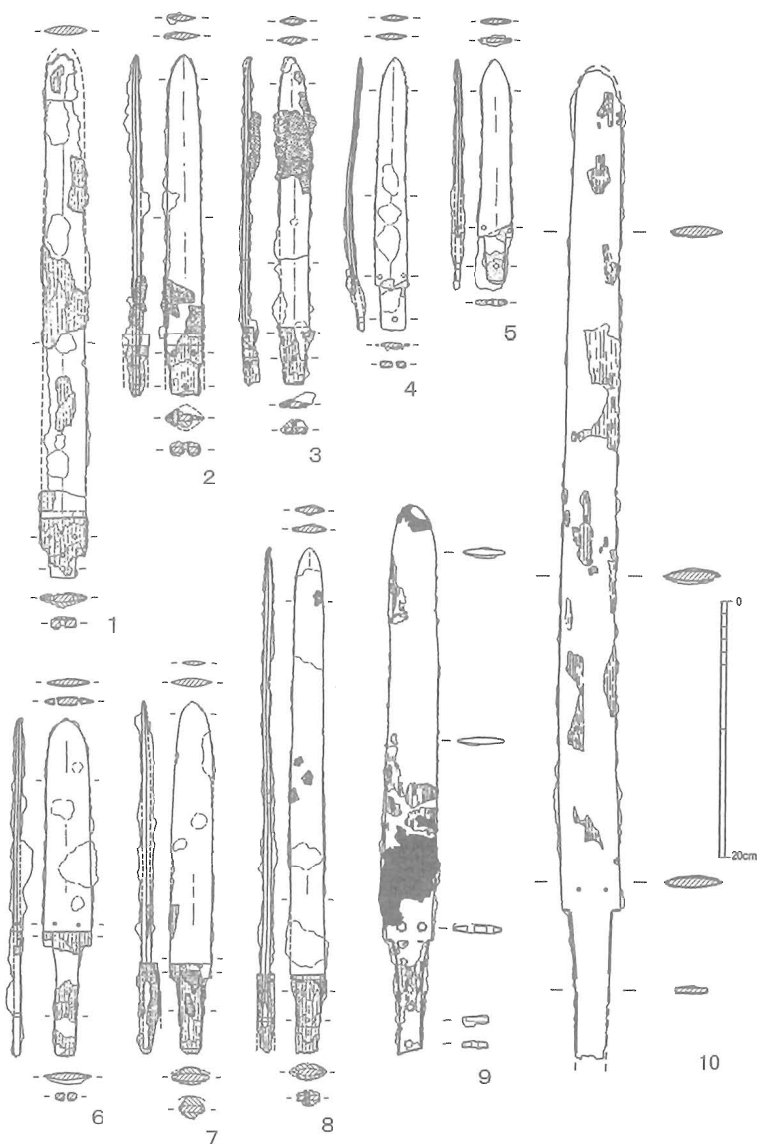
弥生時代の刃関双孔鉄剣は管見に触れる限り、全国54遺跡より87点が出土している（註2）。弥生時代後期のものがほとんどであるが、福岡県福岡市の吉武遺跡群出土例（力武・横山編1996）のように、北部九州では弥生時代中期にまで遡る資料も数多く認められる。また、東日本においても弥生時代中期後葉に比定される資料として、神奈川県秦野市の砂田台遺跡では住居址より刃関双孔鉄剣を分割再加工した鉄斧や刀子が出土している（矢戸ほか編1989・1991）ほか、長野県佐久市の五里田遺跡でもやはり住居址

第39表 刃関双孔鉄剣出土地一覧表

遺跡名	所在地	備考	遺跡名	所在地	備考
新保田中村前遺跡	群馬県		高島遺跡	福岡県	
石鼻遺跡			立岩遺跡		
有馬遺跡		3点出土	粟・西小田遺跡群		
井沼方遺跡	埼玉県		門田遺跡		2点出土
観音寺遺跡			須玖岡本遺跡		2点出土
田端西台通遺跡	東京都		汐井街遺跡		
丸山東遺跡			安徳台遺跡群		
王子ノ台遺跡	神奈川県		東小田峯遺跡		2点出土
真田・北金目遺跡群			徳永川ノ上遺跡		
砂田台遺跡		再加工品・3点出土	中原遺跡	佐賀県	3点出土
草刈遺跡	千葉県	2点出土	みやこ遺跡		
頭無A遺跡	山梨県		横田遺跡		
篠ノ井遺跡群	長野県		シゲノゲン遺跡	長崎県	
浅川扇状地遺跡群			経隈遺跡		
五里田遺跡			西弥護免遺跡	熊本県	
西一里塚遺跡			下山西遺跡		
根塚遺跡		3点出土	池田・古園遺跡		
古津八幡山遺跡	新潟県		都野原田遺跡	大分県	2点出土
原新田遺跡	静岡県		小城原遺跡		2点出土
文殊堂遺跡		2点出土	川部遺跡		
近岡遺跡	石川県		川床遺跡	宮崎県	2点出土
小羽山30号墓	福井県		南摺ヶ浜遺跡	鹿児島県	
伊瀬栗地遺跡	岐阜県		古墳名	所在地	備考
古天王5号墓	京都府	2点出土	新羽南古墳	神奈川県	前期古墳
大風呂南1号墓		12点出土	吾妻坂古墳		中期古墳
大竹西遺跡	大阪府		間門松沢第1号墳	静岡県	中期古墳
妙楽寺遺跡	兵庫県	4点出土	下開発茶臼山9号墳	石川県	中期古墳
半田山1号墓			北谷1号墳	京都府	前期古墳
梨ヶ谷遺跡	広島県		西求女塚古墳	兵庫県	前期古墳
南庄遺跡	徳島県		メスリ山古墳	奈良県	前期古墳・3点出土
吉武遺跡群	福岡県	3点出土	向野田古墳	熊本県	前期古墳
東入部遺跡群			免ヶ平古墳	大分県	前期古墳

から刃関双孔鉄剣が出土している（三石編1999）。日本列島に鉄剣が出現し始めた弥生時代中期には、既に刃関双孔鉄剣は存在していたと言えよう。

弥生時代の鉄剣の把の研究をおこなった豊島直博氏の分類（豊島2004）に従えば、弥生時代の刃関双孔鉄剣の内、茎部に有機質の付着が確認できるもののほとんどには、二枚合わせ式や一木造り式、鹿角Y字式といった木製把や鹿角製把が装着されていた痕跡が認められる。一方で、やりとされる四枚合わせ式に該当するものは皆無である。



1. 大風呂南1号 2. 門田 3. 妙楽寺 4. 古津八幡山 5. 有馬 (1~5. 弥生)
6. 北谷1号 7. 免ヶ平 8. 向野田 9. 吾妻坂 10. 下開発茶臼山 (6~10. 古墳)

第108図 刃関双孔鉄剣の諸例

れるものの中にも、目釘孔が並列するとは言い難い事例も含まれている。刃関部に2孔以上の目釘孔が穿たれる事例に関しては、装具の付け替えの際などに、把の形態に合わせて目釘孔を改めて穿孔し直したものが含まれている可能性がある。

②古墳時代の刃関双孔鉄剣

古墳時代の刃関双孔鉄剣は、現在のところ9古墳より11点の出土を確認するのみである。内訳は、前期古墳出土のものが8点で中期古墳出土のものが間門松沢第1号墳出土例も含めて3点である。前期古墳出土の8点は全て豊島氏の把の分類で言うところの、四枚合わせ式糸巻頂点型あるいは直線型に該当し、ヤリに転用された資料の可能性が高い。弥生時代の刃関双孔鉄剣には、四枚合わせ式が認められない点を鑑みると、把の痕跡から見た限り、弥生時代の刃関双孔鉄剣と古墳時代前期の刃関双孔鉄剣との差異が非常に際立つ。

刃関双孔は、ほとんどが並列双孔に近いもので、極端に斜行するものや、並列四孔になるものは認められない。また、鉄剣の茎部が押し並べて長いため、茎部に縦に2孔が穿たれる例が多いことが、弥生時代の刃関双孔鉄剣と比較した際の特徴と言える。

刃関双孔は、双孔が剣身に直交し水平に並列するものや、剣身に斜行するもの、並列の双孔が縦2段に並ぶものと目釘孔の並び方に差異を見出すことができる。野島永氏は目釘孔の並び方から、刃関双孔鉄剣を並列双孔・斜行双孔・並列四孔に分けて検討を進めた(野島・高野2002)。なお、刃関双孔鉄剣の中には、野島氏の3つの分類に当てはまらない事例も存在する。千葉県市原市の草刈遺跡K区248号土壌墓出土例(小林・麻生編2007)は刃関部に不揃いに4孔が並び、茎部にも不揃いな双孔が並ぶなど、計6孔の目釘孔が穿たれる。静岡県周知郡森町の文殊堂遺跡土坑墓SF23出土例(田村編2006)は刃関部付近片側に単孔があり、茎部に双孔と茎尻に単孔が存在するなど、計4孔の目釘孔が穿たれる。石川県金沢市の近岡遺跡大溝出土例(栃木編1986)も刃関部に不揃いな3孔が穿たれる。並列四孔とさ

（３）弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣の比較

弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣を比較すると、前述の通り、主に茎部長や把の痕跡といった茎部の形態に差異を見出すことができる。茎部長に関しては、弥生時代の刃関双孔鉄剣が3～5cmの短茎剣が多いのに対して、古墳時代のものは6cmを超える長茎剣が多い。把に関しては、弥生時代の刃関双孔鉄剣が一本造りの木製把や鹿角製把が装着されることが多いのに対し、古墳時代のものはやりとされる四枚合わせ式把が多い。一方、身部長の長短で言えば、弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣の間にはそれほど大きな違いを見出すことはできない。

これらのことから刃関双孔鉄剣は、弥生時代に剣として使用されていたものの一部が、古墳時代に入ると装具が付け替えられ、やり転用されたと仮定することができる。しかし、疑問点として古墳時代の刃関双孔鉄剣に長茎剣が多い点があげられる。長茎剣の茎部を裁断して短茎剣に転用することは可能だが（註3）、その逆は困難である。長茎剣における刃関双孔の意義を検討する必要があるか。

（４）古墳時代前期と中期の刃関双孔鉄剣の比較

古墳時代の刃関双孔鉄剣の内、吾妻坂古墳出土例と下開発茶臼山9号墳出土例は、古墳から出土した他の副葬品の年代観などから、5世紀代の資料に位置付けられる。間門松沢第1号墳出土例の時期的な位置付けは難しいが、鞘受部をもつなど、茎部に遺存する把の痕跡からは古墳時代中期に相当する資料と考えられる（註4）。それ以外の8点の資料は古墳時代前期前半頃に比定される。古墳時代中期の3点の資料には、把縁付近への糸巻きの痕跡や四枚合わせ把の痕跡は認められない。茎部長く、剣身部にも木製鞘の一部が遺存していることから、茎部を鉄芯として把が装着され、鞘に収められた状態で副葬されたことが推定される。剣としての威容を保って副葬されている点、やり転用された古墳時代前期の刃関双孔鉄剣とは、明らかに扱われ方が異なっていたことが指摘できる。

古墳時代前期には、弥生時代から使用されていた刃関双孔鉄剣は他の雑多な剣とともにやり転用され流通していた。しかし、古墳時代中期には「弥生時代以来」という伝世品としての付加価値が付帯され、再び剣として副葬された。この場合、使用されなくなった刃関双孔には、単なる目釘孔の痕跡器官としてではなく、「弥生時代伝来の品」を示す役割をも与えられていたことになろうか。比較対象が少なく憶測の域を出ないため、今後の類例の増加により、さらなる検討が必要とされるだろう。

（５）おわりに

弥生時代以来の伝世品である刃関双孔鉄剣が古墳時代にも残存することを前提に、弥生時代と古墳時代の刃関双孔鉄剣、古墳時代前期と中期の刃関双孔鉄剣の比較検討をそれぞれおこなった。古墳時代の刃関双孔鉄剣の類例は少なく、十分な検討を進めることはできなかった。今後の古墳出土資料の蓄積が望まれるところであるが、そんな中であって、間門松沢第1号墳出土例は、古墳時代における刃関双孔鉄剣の性格を考えるうえで、貴重な一例になると言えよう。

註

- 「槍」という字は茎式のやり以外に、袋部をもつホコを表現する際にも用いられることがある。混乱を避けるために茎式のものに「やり」と表現する提案（菅谷1975・寺沢1990）に従うこととする。
- 京都府京丹後市の浅後谷南遺跡墳墓第2主体部出土例（伊野・竹原・河野1998）や長崎県佐世保市の門前遺跡1号箱式石棺墓出土例（副島ほか編2006）、大分県日田市の草場第2遺跡99号土壙墓出土例（高橋編1989）は、茎部の両端に目釘を差し込み、剣身と把を固定することで、刃関双孔と同様の役割を果たしている事例であるが、剣本体に刃関双孔が穿たれていないため、検討の対象から外した。一方、静岡県掛川市の原新田遺跡1号方形周溝墓主体部出土例（平野1987）や長崎県対馬市のシゲノダ遺跡石蓋土壙出土例（小田ほか編1974）、大分県竹田市の小城原遺跡4号墓出土例（宮内編2002）や宮崎県児湯郡新富町の川

床遺跡B区13号墓出土例（有田ほか編1986）は、茎部に双孔が穿たれ、正確には刃関双孔とはいえない。ただし、3例ともほぼ無関で、身部と茎部の境界が曖昧であることから、刃関双孔同様の役割を果たした目釘孔と考え、検討の対象に加えた。

3 刃関双孔鉄剣の中にも、目釘孔を利用して茎部を裁断した痕跡が認められるものが存在する（上田編1998）。

4 豊島直博氏の御教示による。豊島氏による古墳時代の把の分類（豊島2008a）で言うC類あるいはD類に該当すると考えられる。

引用文献

有田辰美ほか編 1986 『川床遺跡』新富町文化財調査報告書第5集 新富町教育委員会

伊野近富・竹原一彦・河野一隆 1998 「浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」『京都府遺跡調査概報』第84冊（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

上田 真編 1998 『浅川扇状地遺跡群・三才遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書34（財）長野県埋蔵文化財センター

小田富士雄ほか編 1974 『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書第17集 長崎県教育委員会

小林清隆・麻生正信編 2007 『千原台ニュータウン』XVII 千葉県教育振興財団調査報告第565集（財）千葉県教育振興財団・都市再生機構

矢戸信悟ほか編 1989・1991 『砂田台遺跡』I・II 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 神奈川県立埋蔵文化財センター

菅谷文則 1975 「前期古墳の鉄製ヤリとその社会」『橿原考古学研究所論集』吉川弘文館

副島和明ほか編 2006 『門前遺跡』II 長崎県文化財調査報告書第190集 長崎県教育委員会

高橋 徹編 1989 『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（1）大分県教育委員会

田村隆太郎編 2006 『森町円田丘陵の遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第167集（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

寺沢知子 1990 「鉄製ヤリ」『園部垣内古墳』同志社大学文学部考古学調査報告第6冊 同志社大学文学部文化学科

栃木英道編 1986 『近岡遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

豊島直博 2004 「弥生時代における鉄剣の流通と把の地域性」『考古学雑誌』第88巻第2号 日本考古学会

豊島直博 2008a 「古墳時代前期の剣装具」『王権と武器と信仰』同成社

豊島直博 2008b 「古墳時代前期におけるヤリの編年と流通」『東国史論』第22号 群馬考古学研究会

西川修一編 2004 『吾妻坂古墳一出土資料調査報告一』厚木市教育委員会

野島 永・高野陽子 2002 「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓（3）」『京都府埋蔵文化財情報』第83号（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター

平野吾郎 1987 「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鎌ならびに鋤先の出土状態について」『研究紀要』II（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

三浦俊明編 2004 『下関発茶臼山古墳群II一第3次発掘調査報告書一』辰口町教育委員会

三石宗一編 1999 『鳴沢遺跡群 五里田遺跡』佐久市埋蔵文化財調査報告書第74集 佐久市教育委員会

宮内克己編 2002 『小城原遺跡・中原遺跡』大分県文化財調査報告書第125集・久住町文化財調査報告書第9集 大分県教育委員会・久住町教育委員会

力武卓治・横山邦継編 1996 『吉武遺跡群』VIII 福岡市埋蔵文化財調査報告第461集 福岡市教育委員会